

内容

1. 日本人の宿命―それは、命をかけて国を守ること

女学校での勤労奉仕の日々

(福山市今津町在住・女性からの聞き取り)

2. ^{いおうとう}硫黄島より妻への恋文、そしてまだ見ぬ子へ

最後まで妻への思いを書き続けた

(尾道市向島町在住・男性からの聞き取り)

日本人の宿命—それは、命をかけて国を守ること

女学校での勤労奉仕の日々

語り手 田中なぎこさん(仮名)(90) (福山市今津町在住)

昭和 3 年 5 月	因島大浜町に生まれる
昭和 9 年	大浜尋常小学校入学
昭和 18 年	私立増川高等女学校入学
昭和 20 年 8 月 6 日	広島で原爆投下
8 月 8 日	福山大空襲により女学校の校舎が消失
昭和 21 年 3 月	女学校卒業

かんきつ畑の農家に生まれる

私は因島大浜町の出身で、7人きょうだいの5番目として生まれました。大浜町は島の北部にあり、大きい灯台*で有名です。実家はかんきつ畑を所有し、みかん、はっさく、ネーブル、ザボンなどを育てていました。畑は4カ所あり、たくさんの人が出入りしていましたね。父は畑の運営のかたわら、町長を務めており、いつも人のために生きるように言っていました。



【大浜埼灯台】大浜町が臨む海峡は「布刈瀬戸」^{めかり}と呼ばれ、古来より多くの船が往来している。海峡を航行する船の安全を守るため1894年（明治27年）よりこの灯台が点灯され現在まで活躍している。

戦前の学校制度

女学校へ進学する女子はクラスで一人だった

田中さんは、尋常小学校を卒業し、その後、かねてよりあこがれの女学校に進学します。

戦前と戦後では教育制度が違います。現在、小学校を卒業すると、100%の生徒は中学校へ進み、98%の生徒が高等学校へ進学するのに対して(通信制含む)、昭和15年の統計によると、小学校終了後の中等教育への進学率は25%、女子に限ると22%、つ

まり5人に1人が中学校へ進学したということになります。

(ただし、昭和16年に国民学校令が發布され、義務教育が6年間に引き上げられます)

当時、女学校にいく子はほとんどいませんでした。クラスでは私一人でした。本当は尾道の女学校へ行きたかったのですが、色々と事情があって、福山の女学校へ行くことになりました。

表5 中等教育機関への進学率

年 度	男	女	平 均
明 治 28 年 (1895)	5.1%	1.3%	4.3%
33 (1900)	11.1	2.7	8.6
38 (1905)	12.4	4.2	8.8
43 (1910)	13.9	9.2	12.3
大 正 4 (1915)	10.8	5.0	8.1
9 (1920)	19.7	11.5	15.8
14 (1925)	19.8	14.1	17.1
昭 和 5 (1930)	21.1	15.5	18.3
10 (1935)	20.4	16.5	18.5
15 (1940)	28.0	22.0	25.0
20 (1945)	46.9	43.6	45.3
25 (1950)	55.0	38.0	46.7
30 (1955)	55.5	47.4	51.5
35 (1960)	59.6	55.9	57.7
36 (1961)	63.6	60.3	62.0

(注) 昭和22年以前は小学校(尋常科またはそれと同程度)の卒業者のうち、旧制中学校・高等女学校(実科を除く)・実業学校(甲)および師範学校(第1部)のそれぞれ本科へ進学した者の割合をとった。昭和23年以降は新制中学校を卒業して新制高等学校(本科)へ進学した者の割合をとった。

中等教育機関への進学率(文部科学省ホームページ <http://www.mext.go.jp> より引用)

尾道に嫁いだ姉を頼って、^{つちどう}土堂の家^{ますかわ}に下宿して福山の増川高等女学校*に通いました。汽車で尾道駅から福山駅に行き、駅から30分ほど歩いていましたね。モンペ姿でしたが、あこがれの女学校ですから、そんなことは気にしませんでした。

*増川高等女学校

明治29年、増川ヒサにより創立。現在の明王台高校、福山市立短期大学(現・福山市

立大学)の前身。

工場で勤労奉仕の日々

【学徒勤労働員】第二次大戦下の労働力不足を補くために進められた、国家による学生の強権的動員。戦争拡大に伴い軍需部門を中心に労働力不足が深刻化したため、政府は昭和 18 年(1943)六月学徒戦時動員体制確立要綱を決定し、学徒の軍需部門への勤労働員を一段と強化した。翌年三月には学徒全員の工場配置が決定された。昭和 20 年 3 月には本土決戦態勢に向けた一年間の授業停止による学徒勤労総動員の体制がとられた。(『日本史広辞典』山川出版社より引用)

なぎこさんが女学校へ入学したのは昭和 18 年。太平洋戦争真っただ中です。働き盛りの男性は戦場へ行き、農場の労働力、工場の人手不足を補充するため、学校の生徒が無料で農場や工場で勤労奉仕する「学徒動員令」という法律が敷かれていました。

せっかく女学校へ行っても勤労奉仕ばかりで授業が受けられず残念だとか、そういう考えは持ちませんでした。それが当たり前だと思っていました。



戦時中、三菱電機福山工場での入社式。モンペ姿の女学生が見える。



工場で働く若い女性。学徒動員令以外にも、昭和 19 年(1944)8 月、「^{じょし}女子挺身勤労令」によって、未婚の女子は工場で働くようになった。

写真：福山市人権平和資料館発行
『平和を求めて』より引用

福山の軍需工場

福山市の文化発信の芸術ホール・リーデンローズ近くにある三菱電機福山製作所は、太平洋戦争中は戦争に関わる物資を生産する軍需工場でした。現在、私たちの生活に欠かせない電気部品を作る工場で、かつて飛行機から落とされる爆弾の部品が作ら

れていました。(福山市人権平和資料館発行『くらしを守る人権と平和』と聞き取り参照)
それは、何も三菱電機工場だけではなく、日本全国の工場は何かしら戦争に関わっていたのです。



①(左上) なぎこさんが勤労奉仕した三菱電機福山工場。昭和 10 年(1935)当時。②(右上) 帝国染料工場(現在の日本火薬福山)。国内有数の爆弾原料を製造していた。③(左下) 陸軍歩兵第四十一聯隊^{れんたい}の演習風景^{れんべいじょ}。練兵所は現在の三菱電機福山製作所にあった。①～③は福山空襲の際、爆弾投下の目標となった。

(写真引用：福山市人権平和資料館発行『くらしを守る人権と平和』)

今の三菱電機福山製作所で、爆弾の電源を作っていました。6 発撃ったら爆弾本体ごと自動的に爆発するというものでした。

著者「そういう爆弾を作っていた、ということは当時知っていましたか？」

田中さん「はい。」

著者「例えば、アメリカ軍との上陸戦が起きた場合、自分が戦争で死んでしまうことについて怖いという感情はありませんでしたか？」

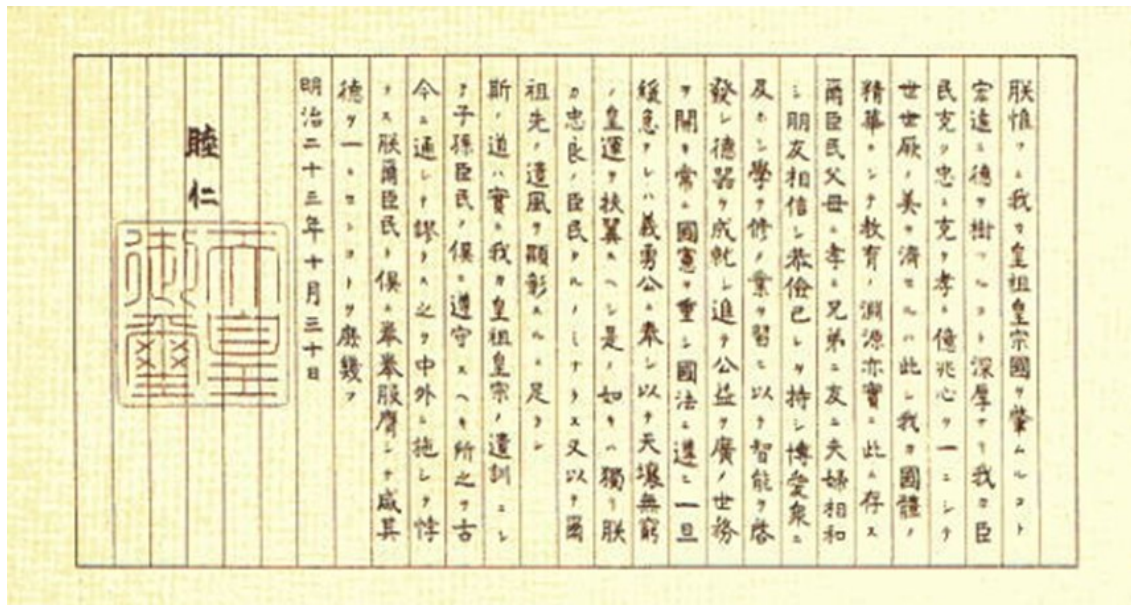
田中さん「ありませんでした。」

しばらく沈黙の後

田中さん「それは、日本人の宿命です。日本の国民として生まれたからには国のために身を捧げる。それが当然のことでしたから。」

きょういくちよくご
教育勅語

近年、大阪の幼稚園で幼児たちに暗記させていたということで話題になった教育勅語ですが、これは明治 23 年(今から約 130 年前)、明治天皇によって国民に発せられたお言葉で、第二次世界大戦終了までは、日本人の、特に道德教育の根幹となっていました。戦前まで小学校では、教育勅語を暗記した生徒たちが、定期的に読み上げていたといいます。



(明治神宮 HP より引用)

原文のままでは内容が分かりにくいので、明治神宮 HP に掲載されている口語訳をご紹介します。

【教育勅語の口語文訳】

私は、私達の祖先が、遠大な理想のもとに、道義国家の実現をめざして、日本の国をおはじめになったものと信じます。そして、国民は忠孝両全の道を全うして、全国民が心を合わせて努力した結果、今日に至るまで、見事な成果をあげて参りましたことは、もとより日本のすぐれた国柄の賜物といわねばなりません。私は教育の根本もまた、道義立国の達成にあると信じます。

国民の皆さんは、子は親に孝養を尽くし、兄弟・姉妹は互いに力を合わせて助け合い、夫婦は仲睦まじく助け合い、友人は胸襟を開いて信じ合い、そして自分の言動を慎み、全ての人々に愛の手を差し伸べ、学問を怠らず、職業に専念し、知識を養い、人格を磨き、さらに進んで、社会公共のために貢献し、また、法律や、秩序を守ることは勿論のこと、非常事態の発生の場合は、真心を捧げて、国の平和と安全に奉仕しなければなり

ません。そして、これらのことは、善良な国民としての当然の努めであるばかりでなく、また、私達の祖先が、今日まで身をもって示し残された伝統的美風を、さらにいっそう明らかにすることでもあります。

このような国民の歩むべき道は、祖先の教訓として、私達子孫の守らなければならぬところであると共に、この教えは、昔も今も変わらぬ正しい道であり、また日本ばかりでなく、外国で行っても、間違いのない道でありますから、私もまた国民の皆さんと共に、祖父の教えを胸に抱いて、立派な日本人となるように、心から念願するものであります。

～国民道德協会訳文による～

(下線は筆者による。下線部分の解釈が現代でも論争の元になっている一方、道德、愛国心という観点から、今でも教育勅語を大切にしている人々もいる。)

いいなずけを原爆で失う

「神の国だから負けない」という神話は崩れた

おそらく田中さんも、幼少のころから日本国民として「教育勅語」を奉読していたことでしょう。そんな田中さんでしたが、広島に原爆が落とされて以降、もしかしたら日本が負けるのではないかという疑念が生じてきた、といえます。

私には、父が決めた「いいなずけ(婚約者)」がいました。因島出身の父方のいとこで、とても優秀な人でした。広島に住んでいて、何をしていたのか、おそらく働いていたのでしょう、原爆に遭ったらしいと知らせが入りました。数日後だと思うのですが、婚約者の母親が消息の確認のため、広島に赴きましたが、本当に亡くなっていたのを確認したそうです。

私は当時(軍国思想の中で育った)少女でしたので、日本は神の国だから絶対に負けないと信じていたのですが、ああ、日本は神の国ではないのだな、とおぼろげに感じました。

原爆あたりから、まわりの大人たちが「日本は負けるだろう」と表立って口に出すようになりました。それまでは、たとえ「負ける」と思っても表立って言うことはもちろん禁止されていました。

原爆の2日後には福山空襲がありました。私は尾道で下宿をしていたので、直接被害を受けることはありませんでしたが、女学校は焼けてしまい、戦後しばらくは東小学校の校舎を借りていました。

福山空襲から一週間後、8 月 15 日の終戦宣言のことは、学校で聞きました。生徒を集め先生は言いました。

「日本は負けた。日本は今後どうなるか分からない」と。

翌年田中さんは女学校を卒業し、就職します。その後結婚し、3 人の子供を育てるかわら、夫の事業を支えました。

人は時代の中で生きていく

戦前と戦後、価値観が全く違う時代を生きた田中さん。どのような心境であるのか尋ねてみました。

筆者「『昔は貧しかったけれども、心が豊かでよかった』とか、『今の子供たちは平和のありがたさが分かっていない。戦争中と違って授業もきちんと受けられてうらやましい』とか、当時と今を比べて何か感じることはありますか？」

田中さん「よく分かりません。あまり考えたことはありませんね。今の子を見てうらやましいとかも思いません。人はその時代に生まれ、その時代の中で生きていくのではないでしょうか」

別れ際に、田中さんは何気なく言われました。

今でも教育勅語はそらんじることができますよ。眠れない時は、「皇祖皇宗、、」とつぶやくと眠りに入れるんです。

平成 30 年 5 月 24 日
田中さんのご自宅にて

いおうとう
硫黄島より妻への恋文、そしてまだ見ぬ子へ

最後まで妻への思いを書き続けた

林原栄造

大正 4 年(1915)10 月 27 日	広島県御調郡(現・尾道市)向島町江奥で 農家の三男として生まれる
昭和 7 年(1932)〈推定〉 17 才	広島県立尾道中学校卒業 熊本にある陸軍の教育機関へ進む
時期不明	日中戦争に従軍中、重傷を負い、退役し帰郷 造船会社に就職
昭和 18 年(1943)5 月 24 日 27 才	同郷の静美さん(21 才)と入籍 結婚後、因島土生に住む
昭和 19 年(1944)時期不明 28 才	再び招集される
6 月 24 日	広島へ
6 月 28 日	硫黄島の戦いに向け、横須賀出港
7 月 18 日	硫黄島上陸
昭和 20 年(1945)2 月 19 日	アメリカ軍、硫黄島に上陸 3 月 26 日まで 36 日間にわたる死闘が繰り広げられる
3 月 5 日	29 才(享年 31 才)アメリカ軍との激戦で玉砕
3 月 10 日	林原透さん生まれる
平成 9 年(1997) 4 月 18 日	静美さん逝去(享年 77 才)

硫黄島の激戦で亡くなった林原栄造さんは、もうすぐ生まれてくる子供のために名前を
考えました。戦地から、奥さんの静美さんへ宛てた手紙にはこうあります。

戦場の真剣な気持ちにより、お互い深く信じ、また信じられて、もしお互いにどんなこと
があっても、深い感情を持ち続け得ることを願っている。

すぐ生まれる子供のためにも、ますます深く尊い精神生活を築くことが大切である。

何も心配する必要はない。くれぐれも体に気を付けて立派な子供を生むことに専念せ
よ。

こんな名前はどうだ。

トウル ヒデアキ エイコ エイコ
透・英明・映子・英子・静子

(昭和 19 年秋)

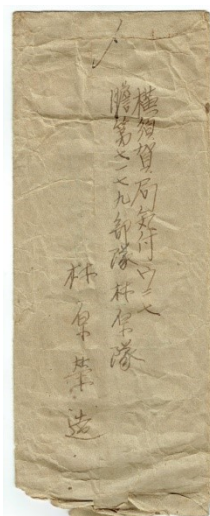
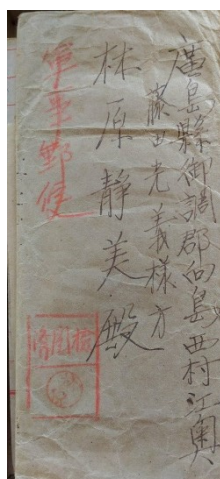
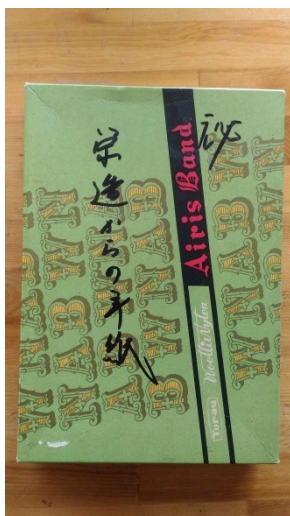
戦後 73 年。73 才を迎えた林原透さんはお父さんに会ったことはありません。

私がまさに生まれた頃、父・栄造は硫黄島の激戦で亡くなっていました。父が硫黄島へ招集された後、母は実家に身を寄せていましたが、父が亡くなったためそのまま実家で生活をしました。

透さんは仏壇に飾られたお父さんの顔写真と親戚から聞く断片的な情報以外、お父さんのことはほとんど知らなかったといいます。

母は全くとっていいほど父については何も語りませんでした。母親に、何か形見のようなものはないか尋ねたこともあるのですが、その時は中国で使用していた父の軍服を見せてもらっただけでした。

ところがです。母が亡くなって仏壇を整理していたら、これが見つかったのです。



中隊長である栄造さんは、「閲覧済」の欄に「林原」と自ら押印していた。そのため率直に感情を発露できていたのではないかと透さんは考えます。

手紙オモテ、ウラ

「秘 栄造からの手紙」と書かれた紙箱に、母の静美さんは、夫から送られた手紙やはがきを大切に保管していました。

「農家ではあるが、教育熱心な」家の三男として生まれた栄造さんは、尋常小学校を卒業後、親に黙って広島県立尾道中学校(現在の広島県立北高等学校)という旧制中学校を受験しました。

「旧制中学校」とは、明治時代に作られた男子教育のための教育機関で、当時は5年制でした。それらは戦後「高等学校」に名称が変わり、現在でも伝統を重んじ、難易度の高い傾向があります。大正14年に設立された尾道北高は今年で創立93年を迎えます。

当時義務教育は小学校6年間のみであり、中学校への進学率が昭和10年では男子16%であったことを考えると(前出のグラフ参照)、たとえ教育熱心な家であっても、三男である栄造さんが職業学校へ進まなかったということは、学問へのあこがれが強くあったのだと想像されます。

実際、栄造さんの手紙を読むと、非常に達筆で、几帳面かつ教養の深い人物であったということが伝わってきます。

さて、昭和7年頃でしょうか、中学校を卒業後、栄造さんは熊本にある陸軍の教育施設に進み、軍人としての道を歩み始めます。当時、日本は領土拡大路線のため、中国とは常に緊張状態にあり、昭和12年には日中戦争(当時は支那事変といわれていた)が勃発します。時期や場所は不明ですが、栄造さんは日中戦争に従軍していました。

従軍中、栄造さんは首に鉄砲玉が貫通し、負傷して軍役を退きます。その後因島の造船所で働き、静美さんと結婚します。お見合いであったのか、恋愛であったのか定かではありませんが、6歳年下の静美さんは向島江奥(えのおく)という同じ地区の出身です。

新婚まもなく静美さんの両親を訪問した時のお礼状が残っています。

(昭和18年・義父宛て)

謹啓

昨日は度々参上いたしまして色々とお迷惑をおかけいたしました。

思いもかけぬ御馳走に久方振りに腹の虫も満足した様であります。

御両親様始め皆様様の御厚情身にしみて嬉しく思っています。

結婚早々に始めて参りまして 野戦帰りの無遠慮をお見せしてしまい

定めて驚きの事と少々後悔いたしています。

今後ご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

透さんによると、栄造さんは結婚前後、大阪の鉄工所で単身赴任生活をしていたようです。次の手紙からは、新婚当初の初々しい夫婦の間柄が伝わってきます。

(昭和18年5月14日・妻静美宛て)

無事帰宅して働いている。君も元気か？今日よりまた下宿住まいだ。いろいろと一緒に過ごした四〇〇の間のことが思い出されて寂しくて困る。君の可愛い寝顔が目先にちらつく。早く逢いたい。

この十六日は逢えない。二十二日の夕方には帰るつもりだ。その日が待ち遠しい。家の

方も準備している。愛の巣を営める日も近い。待っていてくれ。
御一報まで。

5.14 栄造

(筆者注：○は読解不能)

「愛の巣」探しは単身赴任中に行われていたようです。一日でも早く会いたい気持ちを栄造さんはストレートに表現しています。

(昭和18年〈推定〉・妻静美宛て)

妻へ

お便り拝誦 非常に嬉しく繰り返し読んでいます。君も元気とのこと何よりだ。僕も元気旺盛毎日多忙だ。

家も一生懸命になって捜している。昨日も一軒見に行ったが思わしくなかった。今日は友達の世話で一軒借りられるとばかり思っていた家が駄目になって少々気を悪くしている。君にも気の毒だが今少し待っていてくれ。御両親にもそのことを御伝えしてよろしく願いしておいてくれ。この日曜は休めるはずだ。

次の手紙は、単身赴任中、実習の生徒を連れて地元に戻る時の手紙だと思われます。

毎日多忙を極め手紙を出す暇もない。君からの便りを首を長くして待っていたが、待てども待てども遂に来ず。

僕も相変わらず元気だ。先日も言った様に二十七日より広島へ生徒を連れて行く。二十八日の夜は尾道へ帰って、駅の近くの昭和旅館へ泊る(生徒も一緒だ)よう約束している(変わったなら通知する)が、出来るだけ 旅館迄来て呉れ！！

なんとかして一緒に泊まれる様にする。

二十九・三十日は尾道へ出張(一人で)することになっているので或いは家に帰る様になるかもしれない。

その後夫婦は因島(現在の尾道市)^{はぶ}土生に居を構え、平和な家庭生活を送っていました。

たが、後の硫黄島からの手紙で、栄造さんが繰り返し懐かしんでいた「因島^{はぶ}土生の生活」は一年余りで終わりを告げました。28歳の時、栄造さんは再び招集されます。

夫の招集後、因島の土生を離れ、静美さんは実家に身を寄せます。栄造さんはいよいよ硫黄島へ派遣され、そのあわただしさが次のハガキから伝わってきます。もちろん、派遣先は家族といえども伝えてはなりません。

(昭和19年7月〈推定〉 義父宛て・硫黄島上陸後)

藤田光義様

失礼しています。皆様お変わりありませんか。私は大変元気で奉公しています。静美がお世話になりまして何卒よろしくお願いします。

一度ゆっくり留守中のことをお願いして色々とお話ししておきたいと思っていましたが、何分急なことでそのままになりましたが、呉々もお願いします。尚、思うように便りも書けませんので、御父上より本家や御一統の方々に宜しく御伝えをお願いします。

戦地と言えば支那の戦線のことを思っていました、趣を異にし、本当の近代戦の気分を味わっています。内地は果物の季節になったと思います。昨年食べたことを色々思い出しています。

なぜ硫黄島の戦いはアメリカで記憶に刻まれたのか？



左の切手は、硫黄島の戦いの途中、^{すりばちやま}摺鉢山を制した米軍兵が星条旗を立てようとしている報道写真を元にしてしています。硫黄島はわずか22km²の小島ですが、日本の本土空襲を確実にするために、小笠原諸島で唯一滑走路のある硫黄島は、アメリカにとって陥落すべき軍事拠点であったのです。

当初、圧倒的な軍事力を誇るアメリカ側はわずか5日で硫黄島を「落とせる」と考えていましたが、地下壕をはりめぐらし、ゲリラ的な戦いを繰り広げる日本軍に苦戦し、アメリカ軍は完全に制圧するまで36日間かかりました。

死傷者の数は日米それぞれ2万を超え、アメリカの死傷者数は日本のそれを上回り、多大なる犠牲を払ったのです。

硫黄島の激戦後、生還した兵士たちをアメリカ国民は熱狂的に迎え、この記念切手は実に1億5000万枚売れたと言います。ちなみに生きている人物が切手に収められたのはこれが初めてだったと言います。

日米軍の比較を以下に記しますが、日本が人的、物的に圧倒的な劣勢を強いられるなか戦っていた、ということがよく分かります。

	日本軍	アメリカ軍
総兵力	20,933 人	61,000 人
歩兵	9 個大隊	27個大隊
戦車	23台	150台
航空攻撃	75機	8,360機以上
艦砲射撃	なし	総弾薬量 14,250トン
戦死者	19,900人	6,821人
戦傷者	1,033人	21,865人
合計	20,933人	28,686人

(防衛庁調べ)

さて、次の手紙は栄造さんが硫黄島に着任後まもなく静美さんに宛てたものです。赤ちゃん誕生予定の知らせを受け、大変喜んでいる様子が書かれていますが、その後には、留守中の静美さんへ厳しい注意事項が並び、来るべき戦いに向け、全体的に緊張感が漂っています。

(昭和19年7月 妻静美宛て・上陸後すぐ。緊迫した様子)

十八・第二信を受け取る。(静美さんからの)内地よりの最初なり。第一信来たらず詳細不明なるも、赤チャンができていた模様万々歳。嬉しき限りなり。生まれる日を千秋の思いにて待つ。くれぐれも注意をして立派に生め。名前を考慮中である。()は著者注意(一)心配事起こらば、直ちに俺に言ってよこせ。安心して唯よい子供を生むことに専念せよ

(二)実家へ迷惑をおかけせぬ様言っておいた様にせよ

(三)便りは度々詳しく書け。当方よりの受信の様子も忘れるな。当方よりは封書は特別の場合のみ。

葉書も制限あり、親戚にも失礼する旨、伝えておいてくれ。(中略)

静美さんが果物の差し入れを提案したのでしょうか、それに対する栄造さんの応えです。(後には提案を拒否したことを栄造さんは撤回しています。)

今の戦地はお前が想像するようなのんきな所ではない。真の決戦態勢だ。そんな果物なんか口にすることもない。内地にいて食べることにについてあれこれ言っていたが、今から考えれば「ゼイタク」の極みだ。まして酒だ、映画だなんて昔の夢だ。

ただ、今は祖国防衛の重任あるのみ。サイパン・テニアンを思い、鬼畜米英撃滅あるのみ。

透さんによると、栄造さんは船で硫黄島へ向かう途中、米軍に攻撃され、船は大破。荷物をすべて失い、命からがらの上陸だったそうです。

そういう訳で、硫黄島着任草々、必要な物を送る様にとの指示が書かれています。「英語辞典」とあるのは、敵の暗号を読解するのに必要ではなかったのか？との推測を透さんはしています。実際、栄造さんは陸軍で英語を教えていたそうです。

「注文」

(一)書籍・英語辞典・若・俳句・随筆集、その他適当に頼む。

(一)薬・胃腸薬・目薬・ビタミン茶などがよい。

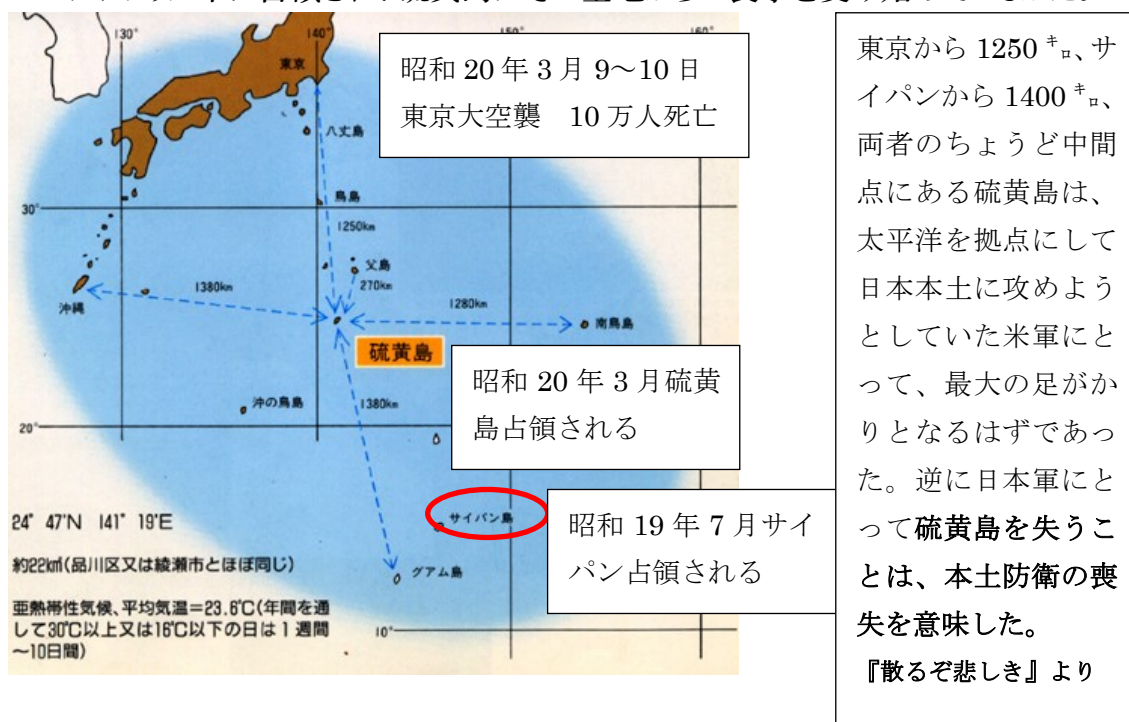
(一)煙草 (一)ふんどし・夏物のズボン・シャツなどで着れば送ってくれ。途中着るものを全部海に無くしたが、友達よりもらって、あまり不自由はしていない。

(一)食物はなんでも欲しいんだが、時節柄無理をせぬよう。尚、輸送の関係も考慮するよう。しかし、正月には何か欲しいね。

あまり度々便りも出来ぬ。くれぐれも注意してよい子供を生むようにしろ。留守中よい事ばかりもないと思うが、くよくよせずに暮らせ。それが世の中だ。

皆様によろしく。

手紙の中に「サイパン・テニアン」とありますが、栄造さんが硫黄島に着いたころ、サイパンはアメリカ軍に占領され、硫黄島はその基地からの襲撃を受け始めていました。



次のハガキでは、硫黄島上陸直後の緊張感とは一変し、環境に順応している様子が

うかがえます。尚、岡本中尉は同郷の向島出身です。

(19年7月以降 妻静美宛て・硫黄島より久しぶりのハガキ。明るい)
都合により永く失礼をした。椰子の木陰で戦線の月を眺めて至極元気旺盛。
岡本中尉も元気。男ばかりの生活も至極愉快だ。俺のことは心配一切無用。呉々も銃
後を頼む。今迄以上に便りも出来ぬ。御一同様に宜しく伝えて呉れ。〇〇より

(19年8月お盆近く・妻静美宛て)

〇〇より第二信

相変わらず元気だ。内地も暑くなってそろそろ盆が来るね。当地も毎日のように暑い
思ったよりは暮らしよい。因島の家が色々と思い出される。内地のことは心配無用。
皆様によろしく。

(〇〇は原文のまま)

次の手紙にある「思い出の日」とはなんでしょうか？緊張感のなかにも、碁で楽しむ様
子もうかがえます。友の墓とありますが、敵機の空襲で亡くなる方もいたのでしょう。

(昭和19年 第四信 妻静美宛て)

元気にやっている。今日は例の思い出の日が。「赤とんぼ」に故郷の〇を偲べども、相
変わらず暑い。昨日は友の墓に参って、久方に休みを取った。木で作った碁石で楽し
んでいる。金は一文も不要。残りすぎて困っている。

思いついた留守中の訓を送る。

- 一、軍人の妻たる本分を忘れぬこと。
- 一、老人に孝養をつくすこと。
- 一、戦時中、夫人たる修養を怠らぬこと。
- 一、体に気を付けること。
- 一、高尚な趣味、教養を深めること。習字、音楽、詩、俳句、映画などもよし。面白い歌
や俳句を書いて送ってくれ。

私も来るべきものに備えて立派な働きのできる様、覚悟と修養につとめている。第一線
は真剣な毎日を送っている。

皆様によろしく。

「覚悟」とは、来るべきアメリカ軍との直接対決で死も辞せぬということでしょうか。静美
さんはどのような気持ちで受け取っていたのでしょうか。

南の島硫黄島でも紅葉の季節があるのでしょうか、故郷を思い出す栄造さんです。

(昭和19年 10 月～11 月〈推定〉・妻静美宛て)

第五信

その後元気か。小生ますます壮健。当方もすっかり秋めいて紅葉した。故郷の稔る秋を偲ばれて、去年の柿や蜜柑を思い出している。

ふるさとのこし路は遠し はりま山
澄める月恋いて 変わらざりけれ

南方の月を眺める。もの思わせる秋である。
「敵機去り 秋風涼し 鶯の声」

戦いの生活も大分馴れた。ただ今、一日の仕事を終わって小屋の窓より夕空を眺め思い出をたどっている。

日本海の波に沈んだ赤い夕陽を・・・
落ち葉散る散る山間に 青い静かな湖恋し・・・
の歌を聞いていた時を○月○日思いいづるがよしに
(○は本人)

栄造さんは、静美さんに繰り返し、信じることの大切さを説いています。
人の世に、信ずるということ程大切なものはない。お互いに信用することによって成り立ち、友情も夫婦の絆も生ずる。世の中に人を信じ得ない者ほど不幸なことはない。また、人を裏切るほど大きな罪はない。

自分もお前に打ち明けた過去の失敗を思い出すと良心の呵責に堪えない。その苦い経験によってお前だけは信じられる男になりたいと今まで努力した。過去も現在もなにもかもさらけ出して一点のやましいことはないつもりだ。

もし俺にどんなことがあってもお前だけはいつまでも俺の心を信じていてくれることを確信して安心して戦っている。
お互いの間に一点の嘘や疑念があってはならぬことを戦地の真剣な生活によってますます強く感じている。

将来、俺たちの生活をますます尊いものに、また、清いものに完成すべく努力したいと思っている。

便りを送ってくれ

この時、栄造さんは生きて帰ると信じていたのでしょうか。それとも、たとえそれが叶わなくても、二人の心が強く結びついていれば、静美さんは残された子供を育て上げることができると考えていたのでしょうか。

ところで、硫黄島では武器どころか生活物資や食料が不足していました。なかでも、生活をする上でもっとも大切な水が圧倒的に不足していました。

硫黄島には大きな山も川もなく、水は貴重なものです。戦争が始まる前、硫黄島には1000人の人々が住んでいましたが、雨水を貯めるなどして、生活のための水をなんとかまかなっていました。そこに、2万人の兵士が送られたのです。「この島では、水の一滴は血の一滴だ」として、当時兵士一人に与えられる一日の飲み水は水筒一本と定められていました。その貴重な水もしばしば汚染されており、多くの兵士がパラチフスや下痢に苦しめられていました。頼りは、時々降るスコールで、これを天幕で受け、貯水槽やドラム缶に移して保管していたといえます。

硫黄島における海軍のトップ・市丸^{いちまる}中將が
スコールは 命の水ぞ 待つ島の心を 余人は知らじ
と詠んだ歌が、硫黄島での水の貴重さを伝えています。

栄造さんの手紙にも、水に関する記述があります。
(昭和19年10月頃〈推定〉、妻静美宛て)
変わりはないか。俺も益々元気に張り切っている。今日は珍しく雨が降って大喜び。洗濯や体を洗っている。風呂も永く入らぬが、慣れて苦にもならぬ。
毎日多忙を極めているが、日が短くなって秋の夜長を持てあましている。毎日毎日同じ生活を繰り返して変わった面白い話もない。岡本中尉にもよく会っているが、話の種も無くなった。奥様に会ったら、元気で働いていられることを伝えてくれ。

林原透さんが生き残り兵の方から聞いた話によると、水を飲むのに「手拭いを雨水に広げて水を含ませ、そのしずくを口に含ませていた」そうです。

しかし、栄造さんの手紙からは泣き言は聞こえてきません。

静美さんは嫁として葛藤を抱えていたり、将来に対しての不安を栄造さんにぶつけて

いたのでしょう、それに対して励まし、自分を信じるように諭しています。

先般奥様の便りに少しはお前にやさしい便りを書くようにとの御忠告を受けたが、軍服を着て甘いことばかりもいかぬ。土生の昔を思い出してくれ。都合で便りを出せぬこともあるかも知れないが、心配するな。その後便りがないが、変わった(第二信のみ)ことはないか。

時には色々と心配事もあるかもしれないが、何事も俺を信じて留守を守っていればよい。心配事は何に限らず率直に言ってよこせ。お互い少しでも嘘や疑いがあったら信じることができないようなら、早く夫婦を精算した方がよい。

そんな中では将来決して長続きはしない。すべてをさらけ出し得る深い契りを結んでこそ真の愛が生ずる。

戦場の真剣な気持ちにより、お互い深く信じ、また信じられて、若しお互いにどんなことがあっても深い感情を持ち続け得ることを念願している。

すぐ生まれる子供のためにも、ますます深く尊い精神生活を築くことが大切である。何も心配する必要はない。くれぐれも体に気を付けて立派な子供を生むことに専念せよ。

こんな名前はどうだ。

透・英明・映子・英子・静子

第六信

時は3年前にさかのぼります。昭和16年(1941)12月8日、日本はハワイの真珠湾を攻撃し、アメリカは大きな打撃を受けました。「奇襲攻撃」をした日本は「野蛮」であるとして、Remember Pearl Harbor(真珠湾攻撃を忘れるな)をスローガンにアメリカ国内で反日感情が沸き起こり、その後日米は真っ向から戦うことになります。

それから3年後。

「12月8日、硫黄島は、太平洋戦争始まって以来、最大の米軍による爆撃に見舞われた。212機の重爆撃機と長距離戦闘機が、千鳥飛行場および日本海軍大砲陣地に爆撃を加えたのである。米軍機は全機、マリアナ諸島に帰還した。日本側は6機の迎撃機を失った」(『硫黄島勝者なき死闘』より引用)

それ以降、アメリカ軍の攻撃は毎日続くのですが、次の手紙はそのような状況の中で

書かれています。

(昭和 19 年 12 月末・妻静美宛て)

十一月十七日に第三信を受領す。俺も、順調のこと(お腹の赤ちゃんの成長のことと思われる)、何よりと喜んでいる。俺もますます元気にて奮闘している。健康面でも案外病気もせず、胸の方も心配していたが大丈夫だ。心身の健康に努めている。

早いもので正月も近くなった。最近めっきり涼しく、朝夕は寒いくらいだ。岡本さんも元気で、よく話しに来る。慰問品を分けてくれたり、奥様が子供さん達の便りの様子を聞かせてくれる。悪友が二人そろってもここでは手も足もでない。待つは奥さんの便りとウマイもののみ。最近の状況は新聞で見ると通り、ますます緊張をして毎日多忙を極めているが、単調な生活で面白いニュースもない。

故郷の便りが何よりの楽しみ。船の来るのを首を長くして待っているが久しく来ない。お前の筆不精か。俺はお前の気持ちを察して出せるときは毎回欠かさず出している。女は感情のこまやかなことが最も大切である。

透さんによると、本土からの手紙を運ぶ便は途中で米軍の攻撃に遭って届かないこともあったそうです。静美さんからの便りが無く、栄造さんの憤りがぶつけられています。

別に変わった話しでなくても日常の生活の様子とか時々のご郷の様子を聞かせてくれれば、安心もし、何よりの慰めになる。戦地の者を思えば、手紙くらい毎日でも書く気持ちになると思うが。

しかし俺の手紙も欲しくなかったら、くれる必要はない。俺も当分出さぬことにするからそのつもりでいてくれ。

(中略)

硫黄島上陸直後、余計な品を送らないよう念押しをしていた栄造さんですが、静美さんに慰問品を送るようにお願いしています。故郷からの野菜や特産品をお互いに配りあうのは兵士たちにとって何よりの楽しみであったのが目に浮かびます。

尚、戦地のことで、慰問品も送らさないつもりでいたが、友達や部下より色々と頂くばかりで気の毒で困る。なんでもよいから時々おくってくれ。夏物のシャツも送ってくれ。

寒くなるからくれぐれも体に注意をせよ。何事に限らずこれからもどんどん(周りの人間はお前のことを)奥様教育をするから、何事も悪いにとらず、素直に聞け。

皆様によろしく。

第七信

「毎日多忙を極めて」いる栄造さんは何をしていたのでしょうか？

軍事力では圧倒的に米軍に劣ることが明らかな中、日本軍の命題は「一日でも米軍による本土空襲を遅らせる」ということでした。そして、硫黄島で選ばれた戦いの方法は、地下壕を島内にはりめぐらせ、奇襲攻撃を仕掛けるという「ゲリラ戦」でした。

『散るぞ悲しき』によると、硫黄島で亡くなった方の軍事手帳には「敢闘の^{ちがい}誓」が書きつけてあったといえます。

- 一 我等は全力をふって守り抜かん。
- 二 我らは爆薬を抱いて敵の戦車にぶつかり^{これ ふんさい}之を粉碎せん。
- 三 我らは一発必中の射撃によって敵を撃ちたおさん。
- 五 我らは敵十人^{たお}を斃さざれば死すとも死せず。
- 六 我らは最後の一人となるも「ゲリラ」によって敵を悩まさん。

米軍上陸までの8か月間、栄造さんも中尉として部下たちと共にこれらの激しい誓いを毎日読み上げ軍事訓練に励み、命を削る思いで地下壕を建設していたと思われます。

以下、地下陣地をつなぐ通路の建設がいかに困難であったかを『散るぞ悲しき』から引用します。

昭和20年の初頭からは、地下陣地をつなぐ「洞窟式交通路」と呼ばれる地下道を掘る作業が本格的に始まった。これが完成すれば、一兵たりとも地上に出ることなく、陣地を行き来できることになる。(中略)

地下15～20メートルの地中を平行に掘っていかなければならないため、作業は困難になる。掘るだけでなく、狭い通路から掘った土を運び出すのも、背中に背負ったり、土を入れた箱にひもを付けて地上に引っ張り上げたりと一仕事だった。

作業の間じゅう、兵士たちは硫黄ガスによる頭痛や吐き気に悩まされた。(後略)

硫黄島の地下壕は場所によって80度になることもあるといい、栄造さんの手紙に書かれた「多忙を極め」る「真剣」な日々は、想像を絶するものがあります。ちなみに、真夏の炎天下の元でエンジンを切り、窓を閉め切った車内にしばらく滞在してみると80度を体

感することができます。おそらく5分とられないでしょう。

次の手紙は、そのような中、静美さんの実家に向けて出された新年の挨拶です。

(昭和20年正月・義祖母と義父母宛て)

御祖母さん

いつももっぱらご無沙汰しています。寒くなりましたが、あまりご無理されぬようくれぐれもお大切にしてください。当方の冬は寒さ知らずで大変楽です。

御両親様

失礼しています。お変わりありませんか。私もますます頑健で生まれて始めての暖かい正月をしました。代用の門松でも気分だけは味わいました。去年は正月早々静美の病気で大変お世話になりましたが、色々と当時のことが思い出されます。今年は、お互いによい年を送りたいものと祈っています。

戦線もいよいよ緊張して一同張り切っています。

留守中静美が色々ご厄介になりますが、くれぐれもよろしくお願い申し上げます。

寒さのみぎりくれぐれもお大切に。

新年のご多幸をお祈り申し上げます。

便りも色々の都合で思うように出せませんので、本家や川尻も失礼していますが、何卒よろしくお伝えをお願い申し上げます。

(昭和20年1月・妻静美宛て)

遂に正月も過ぎた。益々元気である。戦局は重大性を加えたが、一同士気旺盛。朗らかに暮らしている。○島方面の特攻隊勇士の活躍を聞く○○皆同じ覚悟。断じて戦い貫かんのみ。寒さのみぎり、くれぐれも注意せよ。戦地のことは心配無用。皆様によろしく。何事も円満に。新春の多幸を祈る。

(○は筆者読解不能)

穏やかな一日

(昭和20年1月・第10信・妻静美宛て)

小春日和の柿ぼかぼかと暖かい

今日はとくに快晴、これが南の第一線かと不思議なくらいだ。平和な時は全く浮世離れた別天地であつたろう。

戦に勝って、お前を連れて、戦跡廻りの遊覧飛行機で来てみたいーと楽しい想像が出る。俺達の血と汗の努力の跡を見せたいものだ。

今日は早朝より部隊長と偵察に行く。次から次と多忙だ。定期便が来る。
敵もなかなか根気がよい。御苦労様だ。

部下の遺族からの手紙

部下の遺族より手紙を受領す。
「戦死はもとより覚悟。軍人の本懐なり。今までのご厚情を謝す。慰問品を送る。戦友たちと食べてくれ。せめてもの親心の供養なり」と。
泣かされる。

夕方、岡本中尉と湯浅中尉(同期生)が来る。毎日逢っていても「どうかの」「うん元気だ」「手紙が来るか」「いや来ん」なんて愚にもつかぬ話をするが、これが何よりの楽しみ。
岡本中尉が友達よりもらった「ハツタイ粉」を出す。中々よき味だ。
何かあるとお互いに呼びにやって分けて食べる。何事につけてもよいものは友だ。

今日も無事に暮れた。明るい月、尺八の音
今日も無事に暮れた。旧暦の八日ごろであろうか、月がだいぶん明るい。
誰が吹くのか、前の隊より尺八の音が聞こえる。格別の趣がする。
向島では・・・と故郷を思い出すのもこんな一時だ。
今夜もよい夢を見よう。

考えれば、土生の一年の生活は全く夢の様に楽しかった。
くれぐれも体に注意。新春の多幸を祈る。

俺も無念無想一意任務に邁進する。命は天にある。
第10信

妻からの「タコ」に心温まる

次の手紙では、夫から慰問品の注文に静美さんが応えたことが分かります。栄造さんの喜びぶりが伝わってきます。

○月○日

今日も晴天 早朝より船が無事来るを見る。久方ぶりに郵便物かと楽しみにして帰る。
小包を受け取る。大戦果なり。

早速岡本、湯浅両中尉を呼ぶ。「タコ」に土生を思い出し、内地の香りを満喫す。二人とも久方に故郷の香に接し、満腹したと喜んで帰る。

(筆者注：○は原文のまま)

紫の「シャツ」も思い出が深い。

夕方、湯浅君より生大根を五本送ってくれる。大根がこんなにうまかったかと驚くほどうまい。いつももっぱら食べることの日記になり、あさましき限りなるも、これが何よりの楽しみ。人間の姿か？

勝敗とは？生死とは？

栄造さんは小隊長と戦争や死に関する哲学について語り合っています。
今夜は満月だ。若い小隊長と語る。
「勝敗の差は紙一枚なり。意思の差なり。最後まで必勝を信じて戦い貫く者に輝く栄冠は来る」と。

また、「吾人は、すべからく生死を超越せざるべからず。透徹せる人生観を把握せざるべからず。今が修養の好機なり。百歳生きても長しとせず。一瞬にして死するも短しとせず。要はその内容なり」と。

帰還を得れば、まず旅行

寝床に入り紀行文を読む。うす暗いランプの光に、身は戦場にあることを忘れ、心は九州の野に、山陰の温泉に飛ぶ。しきりに旅情をそそる。
帰還を得れば、まず旅行だ。
今日はよき日であった。妻の暖かい心に感謝する。

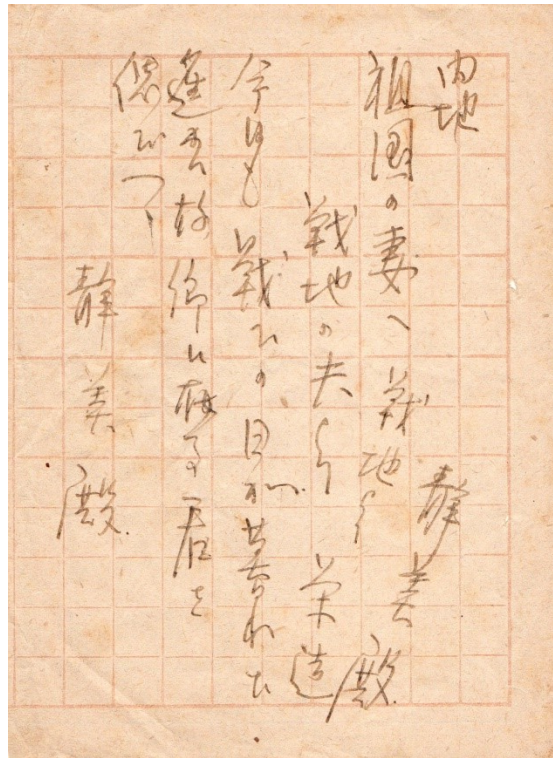
起き出で見れば 月影中天に青く 戦場寂として声なし

米軍上陸前に絶たれた手紙

妻との手紙のやりとりを何よりの楽しみにしていた栄造さんですが、とうとう航空便が停止となります。

「手紙を運んだ航空便は、戦場と家郷をつなぐ細い糸であった。それが断ち切られたのは、いよいよ情勢が緊迫し、米軍上陸近しと思われた2月11日、紀元節の日(神武天皇即位の日)である。『本日をもって郵便止めとする』—その報を、兵士たちはどんな思いで聞いたのだろうか。」(梯久美子著『散るぞ悲しき』より引用)

日付ははっきりと記されていませんが、おそらくこの手紙が静美さんへの最後のものと考えられます。最も短い手紙ですが、栄造さんの偽らざる気持ちが表れています。



内地 祖国の妻へ 戦地より 戦地の夫より 栄造
 今日戦いの日が暮れた
 逢えないが故郷に在る君を偲びつつ 静美殿

2月19日、アメリカ軍はいよいよ硫黄島に上陸し、まさに死闘が繰り広げられ、3月上旬には島の3分の2が占領されます。そして、アメリカ軍上陸から2週間後の3月26日、栗林兵団長と共に残された数百名の兵が最後の「斬り込み」を果たしますが、すべて玉碎し、アメリカ軍は完全に硫黄島を制圧をします。日本兵2万2千人のうち生き残ったのはわずか千名です。

とはいえ、18キロにもおよぶ地中十数メートルの地下壕にひそむ兵士たちにアメリカ軍は苦戦し、戦死・負傷者の合計数では日本のそれを上回るという想像以上の犠牲を生むことになりました。

栄造さんは、3月5日までに亡くなったという記録が残っています。以下は、透さんが硫黄島で遺骨収集をした際、島内の航空自衛隊基地にある資料室で閲覧した内容です。透さんが知り得た軍事的な情報はこれのみです。

独立速射砲第十一大隊 胆七一七九 野手部隊

総員 262名 戦死 246名 生還 16名 出身地 広島、島根

位置 東山南側元山船見台東西の線

戦況 大隊本部第一中隊(林原栄造中尉)元山南側東西の線に布陣、二月二十五日以来元山飛行場に侵入の戦車一カ大隊を先頭に約一カ師団(海兵第三師団)を・・・と共に激戦中であった。

特に二十六、七日の両日は至近距離から敵戦車に直撃弾を浴びせ肉迫攻撃等で死斗、その数輦を撃破したが衆寡敵せず(少数は多数にかなわず)火砲のほとんどを失い、安荘大隊残存者と合流し、二十八日に旅団司令部に合流、玉名山周辺において夜間の斬り込みに出撃し三月五日頃までに野手大隊林原中隊長以下玉砕するに至った。



地図

<http://www.iwojima.jp/data/data1.html>

より引用

軍人として命も顧みず国を守ることを使命とした栄造さんの言葉です。

戦局は益々重大性を加えている。俺も色々な雑念を去って祖国を守るため一意任務に邁進している。戦いという生死を超越した真剣な修練によって自分の魂を磨き得ることを幸せと思っている。すべてを運命にかよわせて、男らしく生きてゆくつもりだ。

(第三信)

その気持ちを奮い立たせたのは、静美さんと生まれてくる子供のためだったのかもしれない。と同時に、最初から死ぬことばかりを考えていたのではなく、生きて帰って愛する妻とかわいい子供と過ごすことを夢見ていたことも手紙を通してうかがい知ることができます。

戦に勝って、お前を連れて、戦跡廻りの遊覧飛行機で来てみたいーと楽しい想像が出る。俺達の血と汗の努力の跡を見せたいものだ。

寝床に入り紀行文を読む。うす暗いランプの光に、身は戦場にあることを忘れ、心は九州の野に、山陰の温泉に飛ぶ。しきりに旅情をそそる。
帰還を得れば、まず旅行だ。

静美さんは林原の姓を残したまま実家に身を寄せ、家業のみかん農園の手伝いをし、再婚することなく一人息子の透さんを育て上げました。

このような貴重な手紙があることは、母以外誰も知りませんでした。なぜ見せてくれなかったのだろうかとも思いましたが、正直、若い頃に読んでいなくて良かったと思っています。私は父親のことを全く知らずに育ったので、もし手紙を読んでいたらどう受け取って良いのか分からなかったかもしれません。



透さんはお父さんと同じ尾道県立北高校を卒業し、その後、蘭を栽培する事業を興します。

私は植物を育てるのが好きなんです。やっぱり人間は好きな仕事をするのが一番ですね。

透さんが運営する洋らんセンターには白くて大ぶりの胡蝶蘭が並んでいます。

白い蘭の花ことばは「清純」。栄造さんの静美さんへのまっすぐな思い。生涯夫に添い遂げた静美さんの一途さ。あたかもそれらは白い蘭に象徴されるようです。

「全くと言っていいほど」夫について語らなかった静美さんは、夫からの書簡を誰にも明かすことなく胸に秘めていました。

最後に、2 人が出会った頃の手紙を紹介します。もしかしたら栄造さんから初めてもらった手紙かもしれません。2 人がまだ恋人同士であったころは、その後戦争によって2 人が引き裂かれるとは想像していなかったでしょう。静美さんはその頃の夢のような生活を思い出し、日々の試練を乗り越えていったのではないかと、筆者は想像するのです。

多忙にて失礼しました。君を思いもつぱら静かに暮れてゆく夕空を眺めています。何故か、もの思わせる春の夕暮れです。頬をなぜるような甘いそよ風に感傷を誘われて色々と昔のことが思い出されます。この八日には逢えると思いますが、その日を楽しみに毎日元気で働いています。先日は大変お世話になりました。皆様によろしくお伝えを乞う。君の便りを待つ。

清美 殿
 草々 栄造

(昭和 18 年春・妻静美宛て・ 2人がまだ出会ったころか)

多忙にて失礼しました。君を思いもつぱら静かに暮れてゆく夕空を眺めています。何故か、もの思わせる春の夕暮れです。頬をなぜるような甘いそよ風に感傷を誘われて色々と昔のことが思い出されます。この八日には逢えると思いますが、その日を楽しみに毎日元気で働いています。先日は大変お世話になりました。皆様によろしくお伝えを乞う。君の便りを待つ。

草々
 栄造

追記

【水について】

日本には「四季」がありますが、日本の南端に位置する硫黄島は海洋性亜熱帯気候に属し、「乾期」(12月～4月)、「雨期」(5月)、「夏期」(6月～11月)の「三季」に分かれ、雨は雨期及び夏期、スコール(突然の大量の雨)か、台風によってもたらされます。

(硫黄島基地隊発行『硫黄島案内資料』参照)

アメリカ軍が上陸した2月はほとんど雨の降らない「乾期」でした。

少し生々しい記述ではありますが、米軍従軍記者の回想録から、日本兵が置かれた過酷な状況を引用します。アメリカ軍がいよいよ硫黄島に上陸してから16日後(3月6日)のことです。

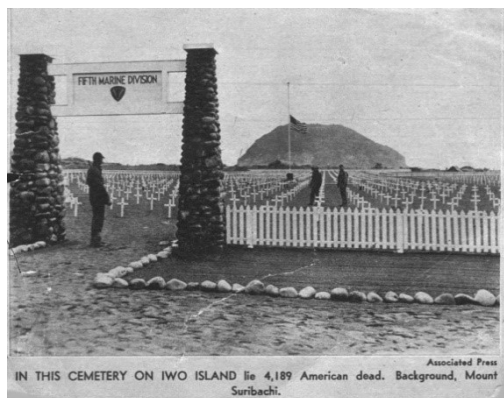
「弾丸を浴びてハチの巣のように穴だらけになった多くの日本兵の遺体は、空っぽの水筒を身に付けていた。これは、日本兵が海兵隊員の殺害を狙っただけでなく、飲み水を見つけようとしていたことを物語っていた。二人の日本兵が持っていた唯一の武器は、自殺用として腰の周りにくくりつけられていたが未使用に終わった手投げ弾だけだった」(ビル・D・ロス著「硫黄島 勝者なき死闘」読売新聞社より引用)

というように、武器どころか、命を支える水すら補給を絶たれていたことが分かります。

【戦没兵士の遺骨収集について】

硫黄島で亡くなった2万を超える日本兵の遺骨は、現在その半数がいまだ収集されておらず、早急に解決すべき問題となっています。

下の写真は米軍上陸後25日目に作られた第五海兵団の墓地です。摺鉢山を背に十字架が並びます。近くに第三、第四海兵団の墓地もあり、合計6,821柱が眠り、10年後、すべての遺体は掘り出され、米本国に埋葬されたそうです。



写真

<http://www.jpagac.com/JOE%20PHOTOS/5TH%20MARINE%20CEM.jpg> より引用

参考文献 ビル・D・ロス著『勝者なき死闘 硫黄島』読売新聞社、梯久美子著『散るぞかなしき』新潮社

平成30年6月中旬
向島洋ランセンターにて聞き取り

謝辞

90 才の誕生日を迎えたばかりの田中なぎこさんは、直前に腰の手術を受け、姿勢を保つのが困難な状態でありましたが、快く聞き取りに協力してくださいました。

林原透さんは、硫黄島の慰霊碑清掃作業に筆者が参加するなかで交流させていただくようになりました。「硫黄島から届いた父親の手紙があるのです」という言葉を頼りに、聞き取りを申し出たところ、すべての書簡を託してくださいました。

軍国思想の中の少女時代について率直に語ってくださった田中さん、硫黄島の激戦で玉砕した栄造さん、戦後夫の手紙を心の支えにして息子を育て上げた静美さん、お父様の手紙を提供してくださった透さんの誠意に応えるべく聞き取り冊子の作成に取り組みましたが、いかんせん能力が追いつかず、それらの方々のお気持ちを伝えきれてるか忸怩たる思いは残りますが、この冊子が戦争と平和を身近な問題として捉えるきっかけとなれば幸いです。

尚、この冊子は蓮華寺檀信徒の皆様のご浄財によって無料配布させていただいています。

お世話になったすべての方々に改めてお礼申し上げます。

合掌

平成30年8月8日 福山空襲の日

蓮華寺 副住職 浦山慈水拝